

東ティモールと南スーダンの想い出

和田 明範 陸自69

外務省で勤務している間、東ティモールと南スーダンにおいて、自衛隊のPKO部隊と同時期に仕事をすることで、自身の任国における自衛隊の活躍を非常に喜ばしく、誇りに感じたものである。これら新たに独立した両国での想い出は尽きない。しかし、その勤務は、戸惑いと苦勞の連続であり、なかなか、最も苦勞したのは「アポ取り」であった。

東ティモールは2002年5月に独立。日本政府は、同国に展開した国連ミッションへの協力として、陸上自衛隊施設部隊を主力とする派遣隊を同年2月から現地に送った。同部隊は国内4か所に展開、国連平和維持軍に対する補給幹線維持等の後方支援を遂行。これら道路補修や橋梁架設等の任務は結果的には東ティモールのインフラ整備に繋がりを、また、数々の民生支援や施設機材譲渡とオペレーター育成等の支援を通じて、同国の国づくりに大きく貢献した。

2002年2月から2004年6月

までの4次にわたる自衛隊の活動期間中、当時の小泉首相、中谷防衛庁長官はじめ多くの国会議員が、9回も、東ティモールを訪れ、部隊の活動を視察し、隊員を激励した。

これら日本政府要人が東ティモールを訪問する場合、日程を作成して受け入れ準備を整えるのは日本大使館の仕事である。東ティモールでは、①同政府の大統領、首相及び外相等との会談、②国連ミッションの特別代表との会談、③JICAプロジェクトの視察、④自衛隊PKO部隊の視察を組み入れることが重要であった。

この種の日程作成に当たり、大統領はじめ東ティモール政府側要人との会談については、先方外務省の儀典（プロトコール）が我が方の要望を踏まえ、アレンジするのが通常である。しかし、独立直後の東ティモールでは、外務省も外国要人を接遇する儀典の態勢が十分に確立していなかった。このため、日本政府要人の東ティモール訪問が決まると、先ず、来訪者、訪問期間・目的、会談希望先とともに、会談アレンジ依頼を記載した口上書（我が方大使発先方外務大臣宛）を作成し、これを外務省に提出すると同時に、口上書の写しをもって、直接、大統領府、首相府及び外務省大臣官房等を訪れ、夫々の幹部職員や秘書官に会ってアポ

イント申し入れを行った。

勿論、この様な行為は外交ルール違反であり、本来は先方外務省が大統領府、首相府、関係省と調整し、会談を設定するのが筋である。しかし、当時の実情では、私達が直接動き回らなければ、先方政府要人との会談実現は困難であったと思われる。

一方、この様な努力にかかわらず、東ティモール政府要人との会談はなかなか設定されず、また、いったん決つても変更になることが度々であった。このため、最終的な訪問日程が確定するのは、日本政府要人が到着する前日になることが多く、時として、到着日の朝となることもあった。

言うまでもなく、我が方政府要人の東ティモール訪問の第一目的は、自衛隊PKO部隊の視察と激励である。それにもかかわらず、自衛隊視察は、東ティモール政府要人の会談日時が確定するまで決めることが出来ずに後回しとなり、部隊側にはいつも迷惑をかけた。

しかし、どの様な日程になろうと柔軟に対応していただいた派遣隊長はじめ隊員には、今でも感謝の気持ちで一杯である。

この様に、東ティモールでのアポ取りには随分苦勞したが、訪問者が到着するまでに日程が整ったのは幸いで



国連東ティモール特別代表の長谷川氏（左側）と地方の視察



あった。

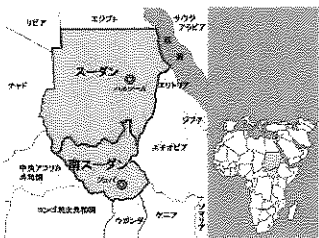
他方、同様に自衛隊PKO部隊が派遣された南スーダンではどうであったか。一言でいえば、苦勞を通り越して悲惨であった。

2011年7月、南スーダン独立直後から、筆者が離任する2012年3月までの間に、自民党PKO調査団、

外務省と防衛省の副大臣等、6回にわたる我が国国会議員の南スーダン訪問があったが、その到着までに日程が確定していることは皆無であった。

サルヴァ・キール大統領はじめ関係大臣との会談を設定するため、南スーダン外務省に申し入れ毎日督促をするが、一向に回答が得られず、訪問日程未決のまま訪問者を空港に迎え入れるのが常であった。

やむを得ず、南スーダン外務省には我が方職員を派遣して、粘り強く会談



南スーダン首都ジュバで道路補修時の自衛隊PKO部隊

実現に向けた交渉を行わせるとともに、JICAにお願ひして、我が方要人には、ODAプロジェクトの現地を視察していただく。

この間、例えば、我が方職員から、外務大臣との会談がセットされたとの報告が入ると、視察をいったん打ち切り、外務省に直行。また、大統領と会えるとの報告を得て大統領府に駆けつけるといった、正に胃が痛む、綱渡り的な車列移動を繰り返した。

日本政府要人には、この間を縫う様にして、南スーダン国連ミッション司令部と自衛隊PKO部隊の宿营地を何とか訪問していただいた次第である。

南スーダンにおけるアポ取りの困難さは、当地の米国や英国大使館の代表からも聞かされた。日本はじめ多くの国々が、独立した南スーダンの国づくりを支援しようとしている時、これらの国々の代表と会うことの重要性を理解しようとしないう彼らの対応には常に憤りを感じた。

2017年5月、自衛隊撤収後も南スーダンは政情不安で、反政府軍との対立が続いているが、同国政府には、まず、自分の国を作り上げようとする強い意志と地道な努力が不可欠である。私事ながら最後の任国となった南スーダンの安定と発展を祈らずにはいられない。